

みずほ Mizuho

題字 高校第十六回生の佐藤美佐子さん
(旧姓田代)の筆になるものです。

私と本との関わり

安念 保昌 (大学教授)

物心ついたとき、私の目の前には、膨大な書籍の棚が並んでいて、微臭く、薄暗い空間があった。そこは、当時で、250年以上は立っていた古い町家で、格子戸で外と仕切られた12畳ほどの部屋に、木製の書棚が並んでいて、そこが、遊び場であつた。この微臭い匂いと、本が立ち並ぶ光景、そして、今にも壊れそうな町家に、刻印付けが起きていた。今でも古都の町屋に入ると、幼き頃にトリップしてしまう。同じ様に、本のびっしり詰まった空間も落ち着くのは、そのせいなのかもしれない。変な文字に見えた本は、後に分かったことだが漢文の本で、父に聞いたら、祖父と漢文で手紙のやりとりをしていたこと。曾祖父も江戸時代学制が始まる前の寺子屋の先生で、何やらそんな時代の本も並んでいたのだから。国道のバイパスが家の敷地を通ることになり、この町家が解体され、その本も町の図書館に寄贈されたと後年聞いた。

話は飛んで、大学に通うようになって、通うと言っても、学内の宿舎から、2キロ以上の林道を歩かねばならなかったが、その先に大きな図書館があつた。1号館ほどの大きな1階が微臭い閉架書庫となつており、周りに閲覧机がいくつあつたが、例によつて、そこが一番落ち着く場所であつた。勉強するといふのではなく、古書と戯れたり、昔の新聞を読んで時間を過ごしたりしていた。そのうち4階に、研究個室が借りられるようになって、院生には、1週間単位で貸してくれて、資料を置き去りにしてもよかつたが、1階の閉架書庫に紛れて、泊まるのができないか画策したこともあつた。それで、学生時代、実家に帰省するたびに、段ボールに本を詰めて送るのか、大きなバッグに何冊も持って帰らないとおれない性格であつた。決して、読んだ形跡はなく、家に帰って仕事はできないということに気づくまで、相当な年月が必要であつた。

豊田にあるみずほ大学に赴任した。深い森の中にある大学に研究個室をいただき、そこに籠る日々が続いたが、何気ないうちに本に囲まれる生活をしていたようだ。本は、書き込んだりするため、ほとんどが私費で買っていた。そして、3000冊近くの本に囲まれて、心落ち着く日々を暮らしていたところ、名古屋に移転する話が出てくるようになった。それらの本をどうしようかと悩むに悩んだあげく、当時はやり出した「自炊」しかない。と、ということになった。良心の呵責にさいなまれながら、本の背表紙を裁断し、スキヤンすることになった。色々な思い出がよみがえりながら、仕事は遅々として進まない。自分のすり込まれた対象を破壊しているのだから、それでも、忍びない本が、かたまり残つた。今となつては、全部やっておけばよかつたと思うのであるが、というのには、スキヤンしてデータ化した本は、これまでとは違った姿に変貌していったのである。最近目が悪くなったせいか、大型テレビに映し出したり、パソコンに中身を読み上げさせたりしている。学生の頃、大変な思いで、本を持ち歩いてきたことが、フォルダ内にある全冊に対して、キーワード検索し、その頁を開くことができるのである。

最近では、出たばかりの本も、こともなげに裁断スキヤンしている。今、携帯のメモリの中には、司馬遼太郎の「街道をゆく」全巻が入つていて、旅する先々で、近場の街道を「読んでみる」が、YouTubeにNHK「街道をゆく」があつて、とりわけ、十津川街道(第12巻)のナレータが2006年に亡くなった俳優の田村高廣であるが、この声が多まらなく落ち着くのである。それで、本の方を読んでみると、あの洪い声の田村高廣が読み上げてくれているように聞こえて、実にいいのである。皆さんも好きなナレータの人をイメージして、本を読み上げてもらうのを試してみたら良いと思う。最近では、アマゾンで電子本を買くと、アマゾンエコーで本を読み上げてくれ、さらには、アマゾンオーディブルでは、多様な俳優が本を読み聞かせてくれるサービスもある。本というメディアが、色々な形を変え、様々なメディアと、脳内あるいはリアルに融合して変貌していく様子は、実に面白いと感じる今日この頃である。

私の人生と共に生きる1冊

加藤 望 (短期大学助教)

皆さんは佐野洋子著「100万回生きたねこ」という絵本をご存知だろうか。タイトルの通り、主人公の猫は何度死んでも生き返り、100万通りの人生を歩む。ある時は王様の飼い猫、またある時は泥棒と行動を共にする猫、おばあさんに撫でられながらひなたぼっこする猫の時もある。

私が初めてこの絵本に出会ったのは、保育者による読み聞かせである。当時4歳だった私は、年度途中から初めて保育所に通うことになった。各学年が1クラスしかないその保育所は、乳児からの長い付き合いがある子どもたちによりコミュニティが既に出来上がっていた。物心ついてきた私は、新しい環境に慣れるまでに時間が必要だった。担任は、小鼻に黒子のある新任の先生で、シイ先生という。いつもシイ先生のそばにいて、安心してた覚えがある。私にとって初めての先生は、優しく温かくて大きい保育者だった。やがて一緒に遊ぶ友だちができ、シイ先生と別れて小学生になり、中学生になった。

その日もいつもと同じように布団に入り、寝ようとしたところで電話が鳴った。母が神妙な口調で返事をしている。シイ先生のお通夜についての連絡だった。次の日、まだ買ったばかりのセーラー服を着て、長い行列に並んだ。前の人について階段を上ると、大きな写真があつた。小鼻に黒子のある見覚えのある顔。まだ20代の若い先生は、私たちの知らないところで皮膚ガンと闘っていた。この日のお別れでは、卒園式の日よりも、静かにたくさん泣いた。

高校3年生になり、受験勉強に励む図書館で、息抜きをしたくなった私は児童書コーナーに立ち寄った。見覚えのある、愛嬌ある猫の絵本を手に取り開いてみると、懐かしいストーリーがあつた。「この絵本!シイ先生が何度も読んでくれた絵本だ!」この時まで、私は「100万回生きたねこ」のことをすっかり忘れていた。改めて読むと、4歳の頃にはわからなかった、なぜ100万回目に猫は生き返らなかったのか?が理解できたのだ。絵本を読むシイ先生が、あの時みんなに伝えたかったこと。10年以上の時が過ぎ、伝わる保育者の思い。「私、保育者になろう!」そう決めた。

張り詰めた空気の中、真ん中に座っていた面接官の教授が尋ねた。「最近、読んで本はなんですか?」私の口は咄嗟に「100万回生きたねこ」です。小さい頃に読んで読んだ絵本を改めて読んでみたら、新しい発見がありました。」と答えていた。教授は、深く二度頷いた。一気に緊張がほぐれ、私は希望する大学に入学した。

保育者を目指す私に母親が、緑色の小さなノートを出してきた。担当保育士の欄に西岡静代という印鑑の押されたばかりの私の様子が詳細に書かれていた。「平日、テラスで泣いて過ごしました。」「お母さんと別れた時、少し泣いていましたが、その後すぐ部屋に入って遊びました。」「もう心配しなくて大丈夫です。」「自分ではあまり記憶のない日々。シイ先生がどれだけ私を気にかけてくれたのか、今でも手にとるようにわかる連絡帳だった。

野良猫として生まれ、自力で生活することで自由を手に入れた猫。そうしてはじめて自分から誰かを愛せるようになった。私たちに1回の人生でも、その中にはたくさんのお会いと別れがあり、多くの環境変化がある。思えばそれは、まるで100万回死んで100万回生きていくようなものである。今はまだ若い皆さんにも、これから先、100万回分の人生が待ち受けているだろう。だが、このことは覚えていて欲しい。主人公の猫は、100万回のどの人生においても、いつだってそれぞれの飼い主からそれぞれの形で、でも間違いなく愛されていたことを。

図書館フェア 2018

7月6日~11日に図書館フェアを開催しました。七夕飾り、新着本展示、テーマ展示、参加型企画などを行いました。たくさんの生徒・学生が足を運んでくれました。



いわさきちひろ生誕 100年

絵本作家いわさきちひろの画集や絵本などを展示し、生い立ちや水彩技法などを紹介しました。展示しきれなかった本は、館内に「いわさきちひろ作品展 閲覧コーナー」として設け、見てもらいました。



復刻版 日本児童文学館

短大の先生からお借りした貴重本を展示しました。大正・昭和に出版された当時の姿を忠実に再現し、復刻した児童文学全集です。どの本も細部が凝った作りになっていて、読むだけでなく見ても楽しむことができました。



さがし絵、だまし絵

不思議なだまし絵やさがし絵、錯視の本を展示しました。みなさん頭をかしげながら、必死に見ていました。



ウォーリーをさがせ in 図書館

絵本「ウォーリーをさがせ」の出版30年を記念して行いました。参加者は書架にいるウォーリーを探し、そのウォーリーが出す問題に答えるというクイズラリーです。参加賞には図書館員手作りのウォーリー消しゴムをプレゼントしました。友達同士で楽しく参加してくれました。

